

香川県内の小・中学校向けの副読本制作活動

第 2 次香川県探検・発見・HOT 県隊

代表者 久保田 直寛（教育学研究科社会科教育専修 1 年）

1. 目的と概要

第 2 次香川県探検・発見・HOT 県隊は、香川県内の小・中学生向けに副読本を作成するために、平成 19 年 5 月に発足しました。副読本作成の目的は以下の 3 点です。1 つ目は、子どもたちにふるさとを大切に思う心を育てることです。平成の大合併後、郷土愛の育成が求められています。その有力な手だてに副読本があります。将来香川県を担っていく子どもたちに香川の良さを気付かせ、ふるさとを大切に思う心を育てたいと考えました。2 つ目は、子どもたちに水問題を真剣に考えさせることです。1995 年 5 月、世界銀行副総裁スマイル・セラゲルティンは、「20 世紀は石油をめぐる戦争の時代だった。だが、21 世紀は水をめぐる戦争の時代になるだろう。」と発言しています。これからの時代を生き抜くには、“水”のことを無視できないと考え、昨年に引き続き“水”をテーマとした副読本を作成することにしました。3 つ目は、作成する私たちの教材開発力を高めることです。どれほど良い教材があっても、それを教材化できなければ、子どもに力はいきません。将来現場に出たとき、目の前の子どもたちに力をつけられるよう、大学院在学中に教材開発力を高めようと考えました。以上の 3 点を大きな目的とし、“水”をテーマとした副読本を作成することにしました。



香川用水分水工

2. 主な実施スケジュール

平成 19 年 6 月	副読本を活用した授業設計
7 月	授業実践（附属坂出中学校等）
8～9 月	授業実践をリフレクションしての補足（資料・写真等の収集）
10 月	平成 18 年度のまとめを学会発表（第 50 回全国社会科教育学会，第 19 回社会系教科教育学会合同大会）
11 月	教材研究，現地調査，資料収集等
12 月	中間のまとめ（第 1 次原稿作成）
平成 20 年 1 月	伊藤裕康先生による原稿の指導
2 月	香川県教育委員会義務教育課主任指導主事，香川大学教育学部附属高松小学校教諭，同坂出小学校教諭，同坂出中学校教諭の指導を受ける

原稿作成，印刷会社との交渉，著作権講習会（於愛媛大学）

3月 原稿の更正，副読本印刷，完成

平成18年度まとめを学会発表（「副読本作成経験の『意味』」香川大学教育学部実践研究総合研究第16号に発表）

3. 成果の内容及びその分析・評価等

作成した副読本「水のパイオニア」の内容を，以下，詳しく報告する。

(1) 副読本の構成

第1章 残したいもの，伝えたいこと

- 1 香川県の水事情
- 2 香川県の祭り
 - ① さぬき豊浜ちょうさ祭り
 - ② 滝宮念仏踊
 - ③ ひょうげ祭り
- 3 祭りから考えること

第2章 Virtual Water—仮想水とは？—

- 1 命の水と仮想水
- 2 うどんと小麦
- 3 わたしたちの食事と仮想水

コラム うどんの水質汚濁

第3章 食の現状と新たな取り組み

- 1 食料自給率とは…？
 - ① すしは本当に，「日本」の食べ物？
 - ② さまざまな食べ物の自給率
- 2 新しい考え方「フード・マイレージ」
 - ① フード・マイレージその前に…
 - ② What's 「フード・マイレージ」
 - ③ さぬきうどんのフード・マイレージはどのくらい？
 - ④ 日本のフード・マイレージを詳しく知ろう
 - ⑤ 食料自給率とフード・マイレージのために～学校での取り組み～
- 3 日本の未来—食料自給率とフード・マイレージ—

コラム 水は「商品」にできる？できない？

第4章 世界の水事情

- 1 ヴェネチアの危機
- 2 死海の死…かい?! (イスラエル・ヨルダン)
- 3 消えゆくアララ海 (水資源の問題)
- 4 ラムサール条約 (水辺の環境保護)

(2) 各章の内容

第1章 残したいもの、伝えたいこと

1 香川県の水事情

第1節では、香川県の水の様子について説明しています。香川県は全国と比べると雨が少ないこと、昔から水問題に悩まされ続けてきたことなどについて、グラフや年表を用いて説明しています。本節から、昔から香川県では水に困ってきたということを読み取らせたいと考えています。

2 香川県の祭り

第2節では、祭りを切り口に水について考えさせるよう構成しています。まず香川県ではどのような祭りがあるのかを地図に表すことで、どの地域でも祭りが行われていることを確認します。どのような祭りが行われているのか、なぜ行われているのかなどを詳しく知るために、さぬき豊浜ちょうさ祭り、滝宮念仏踊、ひょうげ祭りを例にあげています。本節では祭りと水の関わりはもちろんですが、更に祭りが地域の伝統として継続しているものであることにもふれています。



さぬき豊浜ちょうさ祭り



滝宮念仏踊



ひょうげ祭り

3 祭りから考えること

第3節では、3つの祭りのまとめを表にまとめ、とりあげた3つの祭りが水に関係していることや、祭りに参加している人々の願いを確認できるようにしています。また、自分たちの町にはどのような祭りがあるのか、どのように行われているのかなどを調べ、とりあげた3つの祭りと比較できるようにしています。また、自分たちの町の祭りを知ることで、地元に対して愛着をもってくれば、という願いを込めて作成しています。

第2章 Virtual Water—仮想水とは？—

1 命の水と仮想水

「仮想水」と聞いて、分かる人はほとんどいないでしょう。第2章では仮想水について扱います。そこで、仮想水について分かりやすく説明しました。まず、人間には水が必要であることを意識付けるために、図などを用いて説明しています。また、仮想水という名の由来や、詳しい説明をしています。



小豆島の棚田

2 うどんと小麦

香川県でなじみの深い「うどん」を用いて、仮想水の説明をしています。うどんの原料は小麦であり、その小麦はほとんど輸入に頼っています。図や写真、イラストなどを用い、分かりやすく説明しています。

3 わたしたちの食事と仮想水

第2節では、わたしたちの食生活や水がどのように世界に結びつきがあるのかを考えさせるために、気軽に食べることのできる「牛丼」をとりあげて説明しています。実際の牛丼の写真やイラストを用い、具体的にイメージしやすくしています。

コラム うどんの水質汚濁

うどんのゆで汁が環境汚染という深刻な問題に発展しています。これに対する香川県の取り組みや、それぞれの店の状況などもふまえて作成しています。また、この問題に対する香川大学の取り組みなども取り上げることで、幅広いコラムとなっています。

第3章 食の現状と新たな取り組み

1 食料自給率とは・・・？

日本の食料自給率は下がり続け、今では40%をきっています。これは、世界の先進国の中でも危機的状況です。そこで、日本の代表料理である「すし」を取り上げ、日本が置かれている世界の中の食の位置づけを捉えさせたいと考えています。



イメージしやすくするための写真

2 新しい考え方「フード・マイレージ」

本節では「フード・マイレージ」の概念について扱っています。この概念は、食料や飼料の輸入時に輸送機関によって排出される二酸化炭素量に注目したものです。輸入された食料の重量に、輸出国・輸入国間の距離を乗じたものをフード・マイレージと定義しています。日本は輸送距離が長く、輸入量も多いことから特別の問題をもつ概念であるといえます。食料の輸入が環境に様々な問題を与えていること、食料輸入の問題が自給率の低さにも密接に関わっていることを、グラフや資料を読み取ることで理解させたいと考えています。

3 日本の未来 ―食料自給率・フード・マイレージ―

食料自給率とフード・マイレージそれに仮想水は、密接に関わっています。わたしたちの未来、そして地球のためによりよい方向性を導き出せればと考えています。

コラム 水は「商品」にできる？できない？

水を商品化できるのか、その問題提起として主に水道事業民営化問題について扱いました。それに加えて、水取引に関するインドの事例も紹介しています。水問題に対する認識が高まってほしいと考えています。

第4章 世界の水事情

1 ヴェネチアの危機

イタリアの観光都市、ヴェネチアでは、地球温暖化などの影響で街全体が沈もうとしています。世界的に有名な観光地で起こっている水に関わる問題を取り上げることで、日本だけではなく世界にも目を向けてもらいたいと考えています。



ヴェネチアの街の様子

2 死海の死・・・かい?! (イスラエル・ヨルダン)

第2節では、イスラエルとヨルダンの国境に横たわる死海について、その成り立ちや構造、存在危機を中心に取り上げています。死海という湖の存在自体を知ることができ、死海のような湖に興

味がもてるような内容にしました。ここでは、水に関する環境問題は世界中のどこでも起こっていることを、意識してほしいと考えています。

3 消えゆくアラル海（水資源の問題）

中央アジアに位置し、カザフスタン、ウズベキスタンにまたがるアラル海は、世界の水事情を学ぶ上で重要な場所の1つです。地球環境問題がわたしたちの知らないところで危機的な状況に陥っていることを知ってもらいたいと思い、本節を作成しました。

4 ラムサール条約（水辺の環境保護）

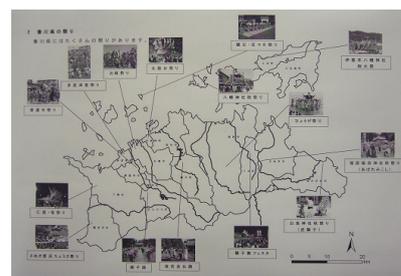
第1～3節では世界の水事情に目を向けてきましたが、身近な環境保護として「ラムサール条約」があります。これは世界の多くの国が参加した環境保護活動で、日本でも多くの湿地がラムサール条約に登録されています。わたしたちの身近なところでも環境保護が行われていることに気づかせたいと考えています。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

本事業が本学や地域社会に与えた影響は主に3つあります。1つ目は、香川大学大学院教育学研究科社会科教育専修の活動に対して多大な評価を受けたことです。香川県教育委員会義務教育課主任指導主事、香川大学教育学部附属高松小学校教諭から指導を受けた際、第一声が、「大学院で副読本を作成するのはすばらしい。作成する人（第2次香川県探検・発見・HOT 県隊）の教材開発力がついて良い。」という言葉いただきました。香川大学大学院教育学研究科では、教師力を高めるための取り組みをしているという認識をしていただいたのではないかと思います。

2つ目は、将来の香川県を担っていくであろう子どもたちに、水問題についての理解を深めたり、ふるさとに愛着をもたせたりする教材が作成できたと考えています。副読本の対象が子どもということで、すぐには成果が見えにくいかもしれませんが、必ず成果があると思います。

3つ目は、副読本の中で香川県内の祭りを取り上げたことで、郷土愛が育つことを期待します。副読本では祭りを切り口とし、水の大切さを伝える章があります。その章では、県内の祭りを各市町1つずつ取り上げ、祭りの様子を伝える写真1枚ずつ入れ、自分たちの町の祭りについて調べられるようにしています。水の大切さだけでなく、子どもたちは様々な県内の祭りを通して香川の良さを感じ取ることができます。また、ある市役所の職員から「地元のPRになるので非常にありがたい。」という言葉いただきました。副読本を通して町の活性化にもつながるのではないかと考えています。



香川県祭りマップ

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

本事業は大学院生活をより充実させるものとなりました。まず、香川県教育委員会義務教育課主任指導主事、香川大学教育学部附属高松小学校、香川大学教育学部附属坂出小学校、香川大学教育学部附属坂出中学校の教諭の指導を受けることができたことは、とても良かったと感じています。義務教育課主任指導主事の指導を受けることは、現場の先生方でもなかなか難しいことです。また、香川大



香川大学教育学部附属坂出小学校教諭の指導

学教育学部附属高松小学校，香川大学教育学部附属坂出小学校，香川大学教育学部附属坂出中学校の教諭の指導を受ける機会は，現場に出てからでは滅多にありません。指導いただいたことを忘れずに，将来現場で頑張りたいとメンバー一同かみしめています。

また，共同執筆と言うことで，院生の意見を練り合わせながら作成することができました。一人ひとりのアイデアでは行き詰まることもありましたが，しかし協働することで教材開発力が高まるとともに，内容がより良いものになったと思います。

それから，著作権についての理解を深めることができたことが，今後，生かせることができると考えています。現在，教員になり活躍していくには，著作権のことを十分理解する必要があります。著作権に対する理解を，大学院の間に習得できたことは，非常に大きな経験であると感じています。



副読本の内容を検討している様子

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

副読本作成にあたり，難しかったことが1つあります。それは著作権です。写真，グラフ，資料などそれぞれに著作権があり，著作権の許諾を得るのが困難でした。著作権は2～3週間程度でとれると思っていたものでも，権利者が分からず時間のかかったものや，著作権がとれずあきらめたものもありました。著作権のことが分からず，2月末日に著作権講習会に参加しましたが，著作権についてもっと早くから研究し，理解を深めておけばよかったと感じています。

副読本を作成しての利点の方が多かったように思います。香川県教育委員会等の諸機関からの評価を得たこと，各市町から本活動に対して期待して頂いていること，著作権などの知らない分野への理解を深めることができたことなど，多くのメリットがありました。そして何より私たち院生の教材開発力が上がったことが大きな財産であると考えます。

今後の計画としては，完成した副読本を平成20年4月以降に香川県教育委員会義務教育課，各市町教育委員会，県内の全小学校・中学校，本書作成にご協力頂いた関係諸機関に1部ずつ配布する予定です。要望があれば，できる限りの部数を配布する予定です。現場で活用していただき，良い点や改善点を調査したいと考えています。その調査に基づき，来年度，昨年度の副読本と今年度の副読本を用いた授業も構想しております。来年度以降もこの副読本作りが継続しますので，本書が今後の活動の参考になればと思っています。

7. 実施メンバー

- 代表者 久保田 直寛（教育学研究科1年）
構成員 大久保 雄司（教育学研究科1年）
梶原 万波（教育学研究科1年）
坂本 壘（教育学研究科1年）
松岡 洋介（教育学研究科1年）
松崎 里香（教育学研究科1年）
宮西 亮輔（教育学研究科1年）
伊藤 裕康（教育学部教授）